



レマン湖のほとり

芹沢光治良



レマン湖のほとり

昭和五十年十一月二十日発行
昭和五十一年一月三十日二刷

定価七〇〇円

著者 芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一 電話 業
務部 (〇三)二六六五一 編
集部 (〇三)二六六五四 郵便
番号 一六二 振替 東京四十八〇八

印刷所 株式会社 金羊社
製本所 神田加藤製本

© Kojiro Serizawa 1975 Printed in Japan
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

レマン湖のほとり

菊池勇夫君の靈に捧ぐ――

（たがいにもっともところをつながれて生涯をともし、
病弱な僕をつねにはげました健康な君が、何故、

この書の出るのを待ちながら、

梅雨あけの晴れた朝、

忽然と筑紫の地で逝かれたか、悲しみにたえない）

第一章 桜花のちった昼さがり

その年（一九七四年）の春、わが家の庭の芝生はたんぽぽの黄色な花におおわれたようだった。少し誇張して言えば、芝生が見えないくらいたんぽぽが咲きみだれた。

私はたんぽぽの花が特別に好きなわけではなく、庭の芝生の方を大切に思い……そうだ、敗戦後（一九五七年）この焼けた屋敷跡に家を建ててもどるなり、武蔵野に名物の南風が春先に埃をまきあげるのを防ぐために、庭へ芝を張らせた。戦前からの出入りの庭師が樹木には目をかけても、芝生の手入れは庭師の仕事ではないと心得るようで、樹木は人間よりも正直にこちらの丹誠にこたえるが、芝生はどうも樹木のような手ごたえがなくなると言って、芝生が根づいてからは、余り面倒をみたがらないので、やむなく私が天気の日に庭に降りて雑草を抜きとったものだ。芝生にはすぐ雑草がのびて、気まぐれに庭へ出る私の手におえないくらいだったが、庭師もついに見かねたらしく、大きな鎌のような鋏を持ちだして、散髪するように丁寧に双方の手で刈りはじめた。六十坪足らずの芝生を刈るのに四日もかかるほどの念入りで、家人は芝刈器を買った方が、庭師も助かるだろうし、経済的であるからと、しきりに言ったけれど、庭師が賛成しないので、彼に委せたところ、年に二回きまって散髪のように手入れしてくれて、おかげで、わが庭の芝生はい

つもゴルフ場のようにみごとに清潔であつた。

それが数年間つづいた頃、突然庭師が軽い脳充血で倒れて庭仕事が可能になつたが、五十歳になつたばかりで、すぐに働けるようになるから、他の庭師を入れないようにとの申し出で、その恢復を待ったところ、二年目に杖をついて庭を見に来て——庭樹はまだ休んでいても大丈夫安心だが、芝生は二月上旬に、風のない日を選んで火をつけて焼いてくれればと、言うのだった。

弟子か仲間を差向けるように頼んだが、若い者は庭のある家が次第になくなるから庭師になりたがらず、皆工場か会社へ働きに出てしまい、仲間の庭師も都の公園課などに就職して、庭や植木に心を寄せる者はなくなつたから、自分が働ける時まで待つてもらいたいと言って歸つた。しかも、行きずりの植木屋など頼んでも、多くは素人で植木の心がわからないで、ただ賃金稼ぎであるから、決して手をつけさせないようにくどくど注意を残して——

働き盛りであるから間もなく働けるものと待つたところ、それから半年ばかり後の春先、医者から仕事をはじめる許可がでたからと、喜んで電話をくれて、手はじめに翌日私の庭からかかると、元気に予告して、その朝起きぬけに第二の発作で、急死してしまつた。全快祝に口にした酒をうっかりすごしてと、細君は顔中涙にして、私の庭の生垣の赤檜や椎や黄楊のことなどさかんに話していたのにと、咽びあげたので、二年半も手を入れない植木はだいぶ鬱陶しくなつたが、なかなか他に庭師を探す気になれなかつた。

もっとも芝生の方は、庭師が二、三回例の散髪刈りをしなかつた間に、気がつくつと、小さなすみれがあちこちに遠慮したように咲き、たんぼほも元氣よく咲き出した。若草山の山焼きのテレ

ピを見て、庭師の注意を思い出して、翌日枯芝に火をつけたが、どうして春になると、すみれやたんぽぽや名も知らない野の小さな花が、芝生のあちこちに顔をあげるのだろうか。何処から種子や胞子が飛来したのであろう、特にたんぽぽはたいへんな勢で夏になっても、秋になっても咲きついで、壮観であつた。家の前の道路を通る女子中学生や小学生が、たんぽぽの花を始めて見るのだから、庭にはいつて観察させて欲しいという始末に、好きなほど採って下さいと、家人は氣前よく答えていた。

庭のたんぽぽを喜んだのは、末の娘であつた。この娘は高校を卒えるなり、上の娘の留学していたパリへ赴き、音楽の勉強をつづけて数年ぶりに帰国したが、花の好きな娘になって帰り、翌朝からピアノを叩き、家中に、便所にまで花を生けて、私たちのこころを明るくにぎやかにした。この娘はたんぽぽの他に、芝生のなかに咲き出した野の花や、亡くなった庭師が花壇に埋めた球根から咲き出したさまざまな花の名を、一つ一つ数えるようにして喜んでいた。また、友人の家で働いていた庭師を頼んで来て、植木の手入れもさせたが、新しい庭師は元氣者で、小さな自動車に老人の助手をのせて来て、手早く枝をおろし、葉に缺をいれて、芝生については、この人手不足な時には、芝刈器で刈るべきだと家人を説いて、次の日芝刈器を買って来て、手際よく快い音をたてて芝を刈った。その音に誘われて庭へ出た娘は芝といっしょにたんぽぽまで刈り倒されるのに仰天したが、元氣者の庭師は言うのだった。

「お嬢さん、芝生にとってたんぽぽは手におえない雑草ですよ。丹念に刈取らんことには、芝が枯れますからね。だが、たんぽぽは頑丈で、花壇のへりや軒下の砂利のなかにも、咲いてるか

ら、それで十分でしょう……さあ、お嬢さんも芝刈器を押してみませんか、一週間に一度刈ってくれば、いい芝生になりますぜ」

娘はむくれた顔で押してみたが、芝もすぎなも簡単にたんぼぼといっしょに千切られて芝刈器の上にもりあがるので、機嫌をなおした。第一、前の庭師が四日もかかった芝生が半日でさっぱりしたことを家人は喜ぶし、娘もそれから折にふれて芝刈器を押したし、私も日光浴しながら運動のつもりで、二十分ぐらい押してみても、その後は庭師の手をかりなくても、芝生はもとどおりゴルフ場の芝生のようにになった。私の家は洋風の建物であるが、軒下を三方、幅一米、厚さ二十センチばかり伊豆石でかこつて、小石を敷きつめてあるところへ、その後たんぼぼが伊豆石の根もとや小石のなかに、さかんに葉をひろげて花を咲かせるばかりでなく、クローバーまで密生して白い可愛い花をつけるので、娘は満足したようだった。

この娘も三年ばかりして、縁あつて若い外交官に結ばれ、再び外国へ赴いて、急に家庭のなかに花と音楽が消えたようで、私も庭に興味を失なつて、それから書齋にこもり勝ちであつた。例の芝刈器も、時たまアルバイトの学生ががり音をつたてているのを聞いたが、その後、芝刈器が動かなくなつたとて、アルバイトの学生は芝の手入れの代りに、庭の雑草むしりをするようであつた。元氣者の庭師も年々顧客先がふえて忙しくなつたからとて、老助手をつれて来て、大急ぎに立木の枝をおろし、梯子の上で鋏を使うだけで、芝生や花壇には目もくれないで帰ってしまう……

そんなわけで、その年の春、私が一年半前に京都で開催した国際会議についての大部の議事録

を関係先に全部発送しおわって、これで長くつとめた日本ペンクラブの会長も辞めさせてもらえるのだと物として、芝生の上におりたち、両手を挙げて大きく深呼吸したのだが、その時、芝生の庭はたんぼぼの庭に化けてしまったようであった。

しかし、悲しみも驚きもしなかった。どうせ埃ふさぎならば、芝生でもたんぼぼでもよかったからだ、また、久振りに重荷をおろしてうらかな春の光を浴びていると、心が軽くなって、たんぼぼの黄色の花が黄金のように感じられた。それ故、籐椅子を持ち出して、ゆっくり空を仰いでいたが、一点の雲もなく空は碧く光っていた。風もないのに、桜の花弁がひらひらまって、二、三弁肩にかかった。家に桜はないが、どこからまって来るのだろうか。

私はしばらくのどかなひとときを楽しんだものだ。その時、花の好きな娘が家をはなれてから四年たったことや、外国で生れた孫娘が二年三カ月になったことがふと思い出された。その拍子にどうしたわけか、自分の死ぬ目のことが胸をかすめた――

私は若い頃、死の応接間にあつて何年も闘病したが、その苦しかった朝夕、もちろん死を怖れたけれど、今になって省みると、自分がこの世から消えることが実感として迫って感じられなかった。今度の誕生日には喜寿ですね、などと注意されるような齢になると、健康な日々死が同居しているような不安がつきまとうものである。数日前に高校時代の同窓会に出ると、同窓生の半分以上は逝ってしまい、弁護士になって有名な仲間が、

「みんな、遺言はつくってあるだろうな。なかったら、遺族が困るぞ。まだな奴はおれの事務所へ来いよ、正式につくってやるから――」

と言ふのを、みな神妙に聞いたくらいで、私もうらかな庭で、自分もその日のために用意しておかなければと、今更らしく思うのだった。さて死の日のために何を用意すべきか、ぼんやり想いめぐらして、先ず娘と孫とに会いにジュネーブに行かなくてはと、突き当るようにして胸に塞まった。幼い孫に自分の記憶を残してやらなければと。

娘夫婦はジュネーブに赴任した時、私が若い日に闘病した土地であるから、借家を探すのに私のために一部屋用意したからとて、それまで幾度もスイスに来るようになすめた。気軽ないつでも行けそうな気がして、機会があつても行く気にならなかつたが、その時には心が動揺して、今行かなければ、健康上飛行機の旅行が不可能になるばかりでなく、幼い孫に会わないで突如この世から消えたら大変だと、あわてたくらいだった。

その瞬間、どんなことがあつてもジュネーブへ行こう、おそくとも梅雨になる前に発とうと、いつも梅雨の頃に弱るので、決心したのだが、同時に、ペンクラブの会長もそれまでに断然辞めなければと、思うのだった。

私がペンクラブの会長に就任したのは七年以上前のことだ、会長の川端康成さんから突然、ペンの事務所で、病氣勝ちだから、副会長の私に会長になつて欲しいと、言われた。私は川端さんを助けるつもりで副会長になつたので、川端さんといっしょに副会長を辞めたいと、すぐに辞退したところ、川端さんは、

「あなたが会長になつてくれなければ、私は会長を辞められないのですよ、私は十七年も会長し

たのですから、我儘を言つては困ります」

と言うのだった。理事会を開く前の打合せ会で、同じ副会長の伊藤整君と専務理事の立野信之君が同席していた。私は、若い伊藤君に会長になってもらいたいと話したが、川端さんも伊藤君も黙りこくつて答えないで、一瞬気まずい沈黙に陥ちたのを、立野君が、この問題は理事会までに考えてもらうことにして、川端さん——と、呼びかけるようにして、すぐに相談事項を持ち出した。三十分もすると川端さんは約束の出版社から迎えに来て行かれて、その後で、再び立野君が会長問題を持ち出した。

立野君によれば、川端さんは会長を辞める準備に半年ばかり前から最後の「根まわし」として、松岡女史に事務局長をやめてもらうことにしたので、この際、私に会長になるようにとのことで、それも伊藤整君が近代文学館の方で手が抜ける時まででもいいから、無理でも引受けてくれということだった。伊藤君はまた、川端さんが口に出すことは熟慮の末のことであるとして、何事も絶対に聞き入れるならわしであったから、この場合も、私にすなおに従うように熱心にすすめた。しかし、ペンクラブは社団法人であり、会長の選出は定款に規定しているのだから、理事会の選挙で決めるべきではなからうかと言って、私は辞退した。

それに対して二人とも反対した。社団法人というのは形式だけで、会員も社会も川端さんのつくった川端さんの会だと考えているからこそ、今までも総てのことを、定款よりも川端さんの意思や希望に従つてはこんで来たからというのだった。全くその通りで、その上、川端さんは国際ペンクラブの副会長をも兼ねていることについて、日本ペンクラブの会長の方をゆずったらと、

外部から注意があったようだからと、そう伊藤副会長の話もあって、私はあくまで拒むことができなかった。

そんなわけで、私は次の理事会で五代目の日本ペンクラブ会長に選ばれた。

しかし、川端さんが会長をやめるための最後の「根まわし」に、事務局長の松岡女史をやめさせたということが、胸につかえて、どうにもならなかった。というのは、半年ばかり前に、川端さんと呼ばれて、伊藤君と四谷の福田屋で夕食のご馳走になったことがあるが、その時、川端さんは考えあぐんだようにして松岡女史の話をした。福田屋へ二人で訪ねた時、仕事中であったように、しばらく待ったが、庭に面した静かな部屋に來られるなり、珍らしく微笑をたたえて——酒をのみますかと、言った。晩春のなま暖かな夜で、伊藤君は——ビールをいただきましょうかと、私に問いかけて、私達は先ずビールの御馳走になったが、川端さんはずっと沈黙がちで、伊藤君も私も、どんな難問で招かれたろうかと、ひそかに心配したくらい重い気持であった。食事が終わってメロンが出た頃、川端さんは突然言われた。

「松岡さんに事務局長をやめてもらっても、事務局はやって行けるでしょうか」と。

——松岡さんは事務局長をやめたいという希望ですか。

——南本さんも仕事になれたから、事務局はやって行けるでしょうが……専務理事の立野君もいることですから……

伊藤君と私はそんなふうに曖昧な問い方をしたが、ややあって川端さんは、

「では、松岡さんにやめてもらいましょうかね」と吐息して、

「松岡さんは困らないでしょうかね、家族をかかえているし……」と言ってから「伊藤君、どうですか、社会評論家というのは、経済的には——」と、加えた。

——文芸評論家はいへんのようですが、社会評論の方はどうですかね、松岡さんは有能ですから、ペンの事務局でつかまえておいては申訳ないですね。

それで川端さんが沈黙したので、私は松岡女史が会長に辞任を申出たものと解したが、伊藤君も同様であったようで、川端さんに話した。

——どうでしょうか、松岡さんは午後だけ出てくれますが、都合によつては、ペンに特別な用件がない場合には、週に二日ぐらいお宅で仕事をするように話したら……と。

ペンクラブの役員はすべて名誉職で、無報酬であるが、松岡さんは理事である上に、事務局長を兼ねておるので、事務局長の職^{ポスト}に対して、月五万円の俸給が出ていた。事務局長としての松岡さんの仕事振りは、東京で開かれた国際ペン大会の運営のみごとだった点で、出席した外国のペンクラブ関係者から、日本女性の組織力とその活動力に驚歎したと、異口同音に称賛されたほどで、月五万円の報酬ではすまないと考えていた。松岡さんは事務局長をしているために、自分の活動や仕事をそがれるだろうし、事務局の南本嬢も仕事になれて、今やペンの事務局も大丈夫だと安心して、本来の仕事にもどろろとするのであろうし、当然だと、私は考えたが、伊藤君も同じだったようだ。ところが、

「松岡さんは地方で講演する時、ペンクラブの事務局長という肩書きでするそうで、そんなことで困ることが起きてね——」

と、川端さんはぼつんと言った。すると、辞任を申出たのではなかったかと、私達は川端さんの顔を見たが、苦悩している表情で「ペンクラブは社会主義かと、心配するむきがあつてね……だから、このことをよく考えて下さい」と言うなり、煙草に火をつけて、前日見た某画伯の個展の話をはじめた……

それから一月ばかり後、ある作家の出版記念会で、立野君に会うと、会の終り次第、伊藤君と三人で川端さんをホテルニューオータニに訪ねようと誘われた。川端さんが話があるというので、新橋の会場からタクシーで駆けつけると、川端さんは仕事がかどらんからと言いながら、私達を部屋に通して、ビールを運ぶように給仕に命じた。途中、車のなかで、川端さんが苦勞しているから、やはり松岡さんにはやめてもらうんですなあと、立野君から言われて、私は考えて下さいと川端さんに言われたのに拘わらず、その後真面目に考えなかったことを悔いたものだ。もっとも、私は考えることはないような気がした、松岡さんが事務局長をしているからとて、ペンクラブは社会主義者の団体でもなし、松岡さんに公私の別に心して、社会の誤解を招かないように注意してもらえば足りると思つていた。しかし川端さんを前に、伊藤君も私も口が重くなつて、ビールをのみながら川端さんの話し出すのを待った。川端さんの仕事のことを思うとそろそろ引きあげなければと、落着けなくなつた頃、ようやく川端さんは、

「やはり松岡さんにはやめてもらった方がいいですね」と、口を開いて急いで加えた。

「松岡さんが事務局にいては、ペンに足が向かないし、ペンクラブを脱退するという人が多いで

すから」

それに対して、私達は答えようがなかったが、川端さんは立野君に、「退職金については内規があるかも知れないけれど、松岡さんの場合は、特別ですから、委してもらって……」と話しかけて、伊藤君と私には、「松岡さんはお母さんが入院しているそうですね」と言われた。

これで松岡さんにやめてもらうことがきまり、松岡さんには立野さんから話して、次の理事会で、川端さんから松岡さんが都合で事務局長をやめられたことを報告して、退職金を兼ねて礼金を贈った。松岡さん自身恐らく辞める理由がわからなかったろうが、私も実際には識らなかったもので、いざ私が会長になる時に、そのために根まわしとして半年前に松岡さんにやめてもらったと、立野君に告げられて、驚いたのだった。

松岡さんが事務局長のままで私が会長になれば、社会ではペンクラブは思想的に左であると言います誤解するからという配慮があったと、その時立野君は説明を加えた。それでは一日も早く伊藤君に会長になってもらうばかりでなく、川端さんには名誉会長として名をつらねて残ってもらわなければと決心した。

川端さんは理事会で二回も頼んだが、名誉会長などおかしいと言って固辞して動じなかった。そして、立野君が伊藤君とともに副会長に、田村君が専務理事に就任してくれたが、そのすぐあとで立野君がしんみり私に話した。

「気にすることはありません。川端は名誉会長にならなくても、自らペンの会長だと思って心を

はなさないから大丈夫です。きっと院政をやります、厄介だけれど、却って会長はらくですよ、法皇の意を実行していただいいますから——」

すぐ伊藤君も加えた。

「戦後のペンクラブは川端さんがつくったようなものですし、社会でもペンクラブは川端さんの会だと思っていますのですから、われわれも川端さんの意思を尊重して行けばいいのです、心配はいりません」

立野君は川端さんを川端と呼ぶほど、親しくしていたので、その言葉は本当であらうし、意気地ないことだが、私はこんな調子でペンクラブの会長になったのだった。実際会長だからとて、どうということもない団体であるが……

昭和十年（一九三五年）に島崎藤村が会長になって、日本ペン倶楽部が創設された時、三十代で小説を発表して間もないことで、文壇関係にも親しい人もなかったのに、フランスに留学した経済学士だということで、ペン倶楽部の会計主任という大役を、それまで識らなかった藤村会長から仰せつかって、それ以来、四十年目であるが、この団体に長い間関係して、しかも、日本が世界を相手に戦争をするという苦しい時代や、敗戦後、再び無から立ち上るような時代を、ペンクラブに深く関係して、その本質上、大いに活動する団体であるよりも、ただ存在することに意味があるような団体であることを識った。それ故、会長になっても、その方針に従うとともに、川端さんが最高の指揮をするので、気がらくでもあった……

二年後、定款上役員の任期は二年であるから、伊藤君に会長になってもらおうとしたが、問題